

# 樹皮舟

Bark Canoe

洲澤 育範

SUZAWA Ikunori

## 要 旨

わが国の舟の研究分野では、樹皮舟 = Bark Canoe = バークカヌーに関するまとまった文献を目にすることはまずない。

バークカヌーも他の伝統的な舟と同じように、地域により、造り方、構造、推進具、用途などさまざまである。その中でも北米大陸のネイティブ・アメリカンが造ったバークカヌーは多様な発展をとげている。本稿では筆者の経験を基に、バークカヌーの実像をできるかぎり具体的に表し、また北米以外の地域のバークカヌーと比較しやすいように資料を整えてみた。

本稿の構成は以下の通りである。

1. はじめに バークカヌーの概要
2. バークカヌーの素材と制作道具と制作場所
  - 1) 素材 樹皮、木の根の紐、目止め剤・接着剤としての樹脂など。
  - 2) 道具 割出し製材、インディアン・ナイフについて。
  - 3) 場所 カヌープレイス。
3. 舟体の構造と造り方
  - 1) 構造 (1) 骨組みが無い。(2) 骨組みがある。
  - 2) 造り方 (1) 樹皮のみを曲げる。(2) 樹皮と骨組みを同時に曲げる。(3) 骨組みを作り、その上に樹皮を被せる。(4) 樹皮で形を作り、その中に骨組みを納める。
  - 3) 樹皮の使い方 (1) ガンネル方向に継ぎ足す。(2) バウ、スターン方向に継ぎ足す。
  - 4) 制作方法 アルゴンキン・インディアン様式のバーチ・バーク・カヌーを具体例として。
4. 北米大陸におけるバークカヌーの分布と用途による形状の違い
  - 1) 用途 河川・湖沼用と沿岸海域用。
  - 2) 分布 北米大陸のバークカヌー用樹木の生育地域を3区に大別して解説。
  - 3) それぞれの地域のバークカヌーの特徴をイラストを用いて解説。
5. 櫂 = paddle = パドルと身体技法 = 漕ぐ姿勢と漕ぎ方
  - 1) 櫂 シングルブレードパドルとダブルブレードパドル。

2) 漕ぐ姿勢など 投げ足、正座、腰掛ける。

## 6. 終わりに

1) 特異なバークカヌーの紹介 チョウザメ鼻のカヌー。太平洋を隔てた共通性。

2) もう一つの課題 福島県産木材の有効利用としてカヌー制作への取組み。

研究者はもとより、環境学習の道具としてカヌーを用いる方々、自然を味わう道具としてカヌーを愛好する方々にも、カヌーの実像と素性を知る資料として本稿を参考にしてもらえれば幸いである。

---

## 【キーワード】 樹皮舟、カヌー、Bark Canoe、Birch bark Canoe

### 1. はじめに

樹皮舟 = Bark Canoe = バークカヌーとは、樹木の皮を主な材として造る舟のことである。

バークカヌーを造るのに適した木は、コルク質の厚い皮をもつ、木の径が一抱え以上になる高木である。

バークカヌー造りが行われていた地域は、東北アジア、北米、南米、ニュージーランドなどの、これらの木々が自生する所である。北欧においてはバークカヌーの出土遺物がある。

バークカヌーの中でも、特に様々な様式が発達したのは、大きく長く、厚く柔らかく加工のしやすい皮をもつ“白樺”の樹皮を使う、Birch bark Canoe = バーチ・バークカヌーであった。北米大陸ではビーバーの毛皮交易を支え、河川・湖沼を網の目のようにつなぐ通商路の確立は、バーチ・バークカヌーがあったからこそだと言える。

しかし、機械製材で造るボートとエンジン動力の普及にともない、1900年代の前半頃から、だんだんと造られなくなった。現在では、業なりわいを支える道具として造られることはまずなく、制作技術の伝承として愛好家や研究者たちが細々と造っている。

筆者は2000年の夏、カナダ東北部・ケベック州のアルゴンキン・インディアン居留地の深い森で、彼らと暮らしをともにし、数多の蚊とブヨに血を吸われ、クマとオオカミの気配に慄きながら、バーチ・バークカヌーを造り、そのカヌーで湖沼群の小さな旅をした。



写真1 カナダ東部ケベック州 Maniwaki=マニワキの森にて。Algonquian=アルゴンキン様式の Birch bark Canoe=バーチ・バークカヌー=白樺の皮舟。女性は Ojibwa=オジブエインディアンのオーネスティン。写真提供・David Gidmark

ここでは、バークカヌーの造り手・漕ぎ手として、その造り方・船体の構造と形成を、あわせて漕ぎ方・身体技法としての漕法を論考する。

なおここで用いる専門用語は、カヌーを漕ぐ人、造る人に分かりやすい言葉を使う。合わせて、『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』2に掲載した論文「日本に収集されたカヤックとバークカヌー」では誌面の都合で写真・図版が多用できなかった。本稿ではそれを補い、また資料性も高め、分かりやすい構成にするために、写真・図版を多く用いる。

## 2. 樹皮舟の素材と制作道具と制作場所

### 1) 素材

#### (1) 外殻となる樹皮

素材となるのはコルク質の厚い皮をもつ、白樺、ダケカンバ、ニレ、エゾマツ、キハダ、トウヒ、シナノキ、クルミ科の広葉樹など、径が一抱え以上になる高木である。

#### 写真2

白樺の大木。樹皮の一部を剥ぎ取り、利用可能と判断した上で伐採する。1970年代後半、カナダ東北部ケベックの森で、このような白樺の大木を見つけるのは稀であったようだ。同地の森は新聞紙とトイレトーパーになったと、写真の女性は言っていた。



写真2 大きな白樺の木の質を確認する



写真3 白樺の品質を確認

#### 写真3

ビーバーが倒した白樺。樹皮の一部を剥ぎ取り、品質を確認する。

#### 写真4-1

冬に採取された白樺の樹皮・表。

#### 写真4-2

冬に採取された白樺の樹皮・裏。冬場の樹皮は油分が多く、強度も強いと言われている。また、樹皮裏は濃い茶色で、それを削ると下地の白い地皮が現れ、文様などを描きやすいので好まれた。



写真4 白樺の樹皮の表(左/写真4-1)と裏(右/写真4-2)。冬季採取

#### 写真5

ビーバーが歯で削り倒した唐檜。一抱えほどあるが、1～2晩で倒すそうだ。一般には、人が何らかの道具で木を切り倒さなければ、舟を作る材は入手し難いと思われがちだが、このように大型の齧歯類の仕業や、洪水や山崩れなどが原因となる自然倒木を利用して初期の舟は造られたと推測する。



写真5 ビーバーに削り倒された唐檜

(2) 樹皮をつなぎ合わせる材

- ①樹皮を縫い合わせる紐として用いる、唐檜などの木の根。
- ②樹皮を張り合わせ、防水効果を高めるために接着剤として、まつやににかわ松脂や膠を用いる。



写真6 幼木の森にて唐檜の根を採取



写真7 根を10~15kgほど収集

写真6

唐檜の幼木の森に入り、四つん這いで地面を這いながら、地表に広がる唐檜の根を採取する。

写真7

全長5m、全幅1m程度のパークカヌーを造るためには、一ひろ尋(1.5~1.8m)以上の長さの根を10~15kgは集めないと  
ならない。



写真8 保管のために根を水に浸す



写真9 根の皮を剥くなどして手を加える

写真8

持ち帰った根は水に漬けて保管する。

写真9

唐檜の根を裂いたり、根の皮を剥くなど加工する。



写真10 木根紐を保管のため水に浸す

写真10

加工された木根紐は水に漬けて保管する。われわれの身近にある物だと藤皮に近い材料だ。水に漬けて柔らかくしてから結ぶ、縫う作業をする。木根紐は乾くと収縮するので、結び目、縫い目は締め強い結束ができる。

図 1

木根紐の加工の手順。

- ①ひげ根に添い二つ割りにする。
- ②芯に近い部分を削ぎ取り厚みを整える。
- ③皮を剥く。

木根紐として根の外側の部位を使う。体を動かし汗を流す作業ではないので、涼やかな風と穏やかな日差しの中でついつい眠くなるが、厚みを均一にするために、指先に神経を集中しなくてはならない。根気と熟練が必要な作業だった。

図 1 木根紐の加工の手順

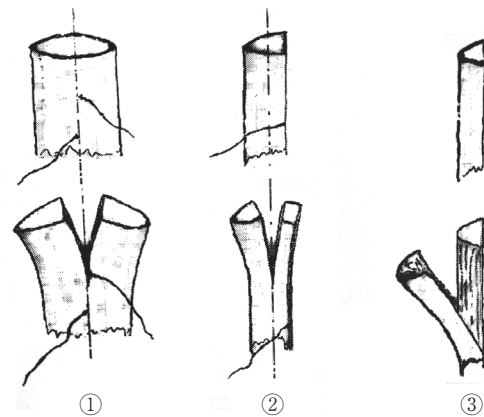


写真 11

舟体樹皮の継ぎ目、縫い目を防水するために塗る松脂を主原料とした防水接着剤。スプルーsgamと呼んでいたが、唐檜の立木の表皮に湧き出た松脂を集め、それに膠にかわのようなものを混ぜ煮てドロドロのコールタール状にしてから塗る。



写真 11 樹皮の継ぎ目には松脂の接着剤を塗る

### (3) 舟体の骨組みや補強材

“割り出し製材しやすい樹木”としては主に唐檜などの針葉樹を用いる。その樹木は、舟の底板、リブ材、ガンネル材、ビーム材に用いる。

製材所に材を買いに行くのではない。一歩足を踏み入れれば方位の感覚が危うくなる森に入る。足元には木の根が入り乱れ、頭上には枝が被さる。オオカミと黒クマの気配に、優秀な犬を連れ、常に回りを警戒させる。合わせて数多のブヨと蚊に取り囲まれる。

斧を振るい木を割る。重い材を担ぎ、足場の悪い森を何度も往復する。息があがり口で呼吸すると、ブヨと蚊が飛び込んでくる。

写真 12

骨組み材の採取。立ち枯れした唐檜。一抱え半はある。立ち枯れした材が割り出し製材しやすい。この時はチェーンソーで伐採した。



写真 12 骨組材として大きな唐檜を採取



写真 13 胸の丈で玉切りをして丸太にする



写真 14 四つ割り、八つ割りにした材

写真 13

胸の丈ほどで玉切りする。  
節の無い一番玉、二番玉を使う。

写真 14

四つ割りから八つ割り程度にした材。口から心臓が飛び出しそうな思いで森から運び出した。

図 2 材の割り出し手順

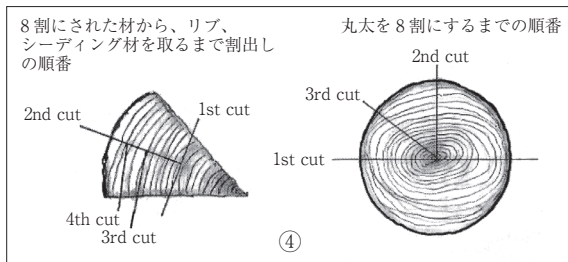


図 2

玉切りした材の割出し手順。図の通り芯材は使わず辺材を使う。立ち枯れした唐檜はほどほどに湿り、ほどほどに乾いており、芯は腐っているので、一抱え半ある丸太でも思いのほか簡単に割出し製材できる。現地で手早く作業するには優れた製材方法である。



写真 15 割出し鉋を用いて厚さ 5cm 程度の板材に加工



写真 16 人力により板の厚みを均一に割る

写真 15

割出し鉋<sup>なた</sup>で厚さ 5 cm ほどの板材にする。鉋の<sup>な</sup>扱じかたと材を割る力と方向加減で、材を均一な厚みにする。

ノコギリで縦引き製材すると良く分かるが、縦引きで材を均一な厚みにするのはとても難しい。木目の通った材なら割出し製材の方がはるかに簡単だ。



写真 17 仕上げの厚みは 7~8 mm 程度

写真 16

左右に割出す力加減で材を均一な厚みの板材にする。

写真 17

厚み 7~8 mm 程度の薄い板材にまで仕上げる。

この作業工程を示す文言として、適当な語彙がなかったので「割出し製材」としたが、写真 17 まで工程を進めると、割るというより、裂く、剥ぐような作業になる。手は優れた道具だと実感できる。

## 2) 道具

筆者の経験を元に紹介する。

- 鉞<sup>まさかり</sup> = 木を切り倒す。丸太を割る。
- 割出し鉞 = 八つ割にした丸太を縦割りにする鉞。
- 斧 = 樹皮に切れ目を入れる。材の荒加工をする。
- 厚刃の割出しナイフ = 割出し鉞で割出した厚板をさらに薄い板にする。
- 先曲がりナイフ = 材の表面を仕上げたり、材の形を整える。
- 大きな穴あけ鉋<sup>きり</sup> = ガンネルに木釘を打つ穴を開ける。
- 小さな鉋 = 樹皮を縫い合わせる木根紐を通す穴を開ける。
- 木槌 = 木割りするときに鉞などで背を叩く。

石器に近い鉄器である。

写真 18

左奥から鉞、木槌、割出し鉞、  
割出しナイフ

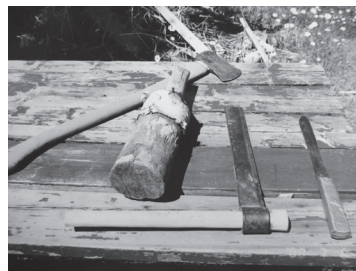


写真 18 道具類。左奥から 鉞、  
木槌、割出し鉞、割出しナイフ

写真 19

様々な形の先曲がりナイフとそ  
の刃を研ぐ鉄ヤスリ。



写真 19 特徴的な先曲りナイフ。  
鉄ヤスリで刃を研ぐ

北米のイヌイットやネイティブ・アメリカンが使う特徴的なナイフ。

クロックド・ナイフ、インディアン・ナイフと呼ぶ。使い方は事項で説明する。

## 3) 場所

北米では、何世代にも渡り同じ場所でパークカヌーを造り、その場所をカヌープレイスと呼び、神聖な場所とされている。

写真 20

地面に杭<sup>くい</sup>を打ち、白樺の樹皮をカヌーの形にしている。この場  
所をカヌープレイスと呼ぶ。

筆者もこの場所で制作し、写真の湖の水で生活した。

この項で写真紹介している、David Gidmark の代表作。

デイビッドとその妻オーネスティンはアルゴンキン様式のバ  
ーチ・パークカヌーのために生きていた。ケベック州を北上す  
る国道から、数 km 離れた森に住み、電気も水道も電話もない  
暮らしを営んでいた。電動工具など一切ない。現代の香りがす  
る物は今にもバラバラになりそうな日本製のシングルキャブ・  
トラックと年代物のタイプライターしかない。

家の前の小さな池に住む、ひとつがいのビーバーに話しか  
け、身の回りの樹木とわずかな道具と汗と知恵でバーチ・パー  
クカヌーを造る。

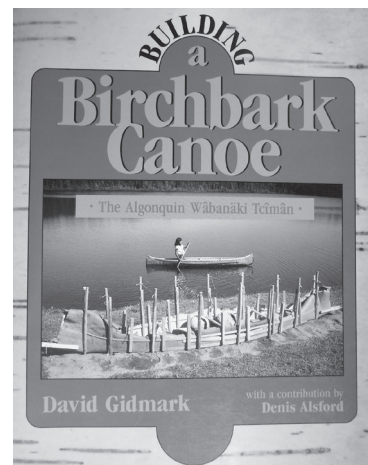


写真 20 Building a Birchbark Canoe :  
The Algonquin Wabanaki Tciman  
Gidmark, David/Alsford, Denis Stack-  
pole Books 1994

### 3. 舟体の構造と造り方

#### 1) 構造

舟体の構造は2種類に大別できる。

(1) 樹皮とわずかな添え木の補強材で舟体を作る

極めて簡素な構造で、例えると長方形の1枚の紙を、長い方向の端をくるくると窄め、糸で縛ったような舟。キャンディの包装紙のような構造。

コピー用紙を使い模型(写真21~23)を制作した。このような樹皮舟は、南米アマゾン、ガイアナ共和国で見られる。

木の皮や植物の葉で作る、水を汲む器を大きくしたような舟だ。<sup>いかだ</sup>筏などの「浮く物」から、「浮く器」への変化が知れる。

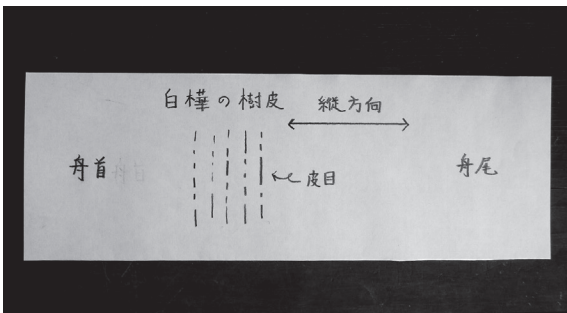


写真21 長方形にした樹皮のモデル

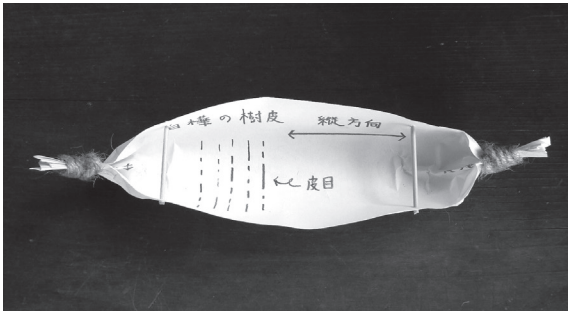


写真22 添え木の補強材が入る

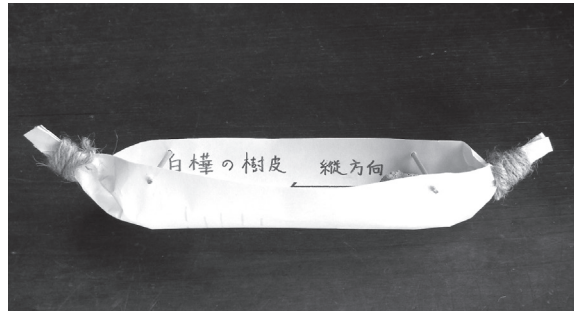


写真23 両端をくるくると絞る

(2) 樹皮で造る外殻の内側に骨組みや板材による補強材がある



写真24 バーチ・バークカヌー (アルゴンキン様式)

写真24

アルゴンキン様式のバーチ・バークカヌー。学術書や研究書にはバークカヌーは、ただ「軽い」と表記されていることが多い。おそらく現物を担いで森を歩いたことはないのだと思う。写真のバーチ・バークカヌーは4mほどの小型のものだが約30kgある。木造構造船に比べれば軽いのだろうが、筆者が担いだ実感は「重い」であった。



## 2) 造り方

造り方は4種類に大別できる。

(1) 樹皮のみを曲げて舟の形を造る(写真21~23を参照)

(2) 樹皮の上に板材の補強材を並べ同時に曲げて舟の形を造る

東北アジア・アムール川のナーナイに見られる工法(参考資料・ナーナイのバークカヌー制作記録 国立民族学博物館・佐々木史郎)。

その工程を簡易な紙模型で説明する。

## 写真 25

白樺の木から樹皮を採取。このように樹皮の天地と舟の舟首・舟尾が一致するカーヌが大部分である。

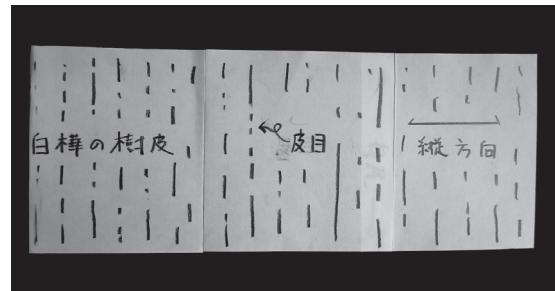


写真 25 樹皮の天地と船首・舟尾が一致する樹皮の形のモデル

## 写真 26

ところが国立民族学博物館に収蔵されているナーナイのバーク・バークカヌーは樹皮を分割し、縦横方向を入れ替え、つなぎ合わせている。

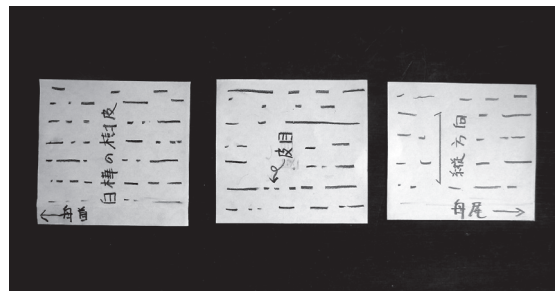


写真 26 樹皮を分割して縦横を入れ替え、連結するモデル

## 写真 27

松脂の接着材で張り合わせる。

舟体に対して樹皮の大きさ、長さの不足分を、舟首・舟尾方向で継ぎ足すのがナーナイの工法の特徴と言える。

樹皮の不足分を舟底から舷側で継ぎ足すのは図3を参照。

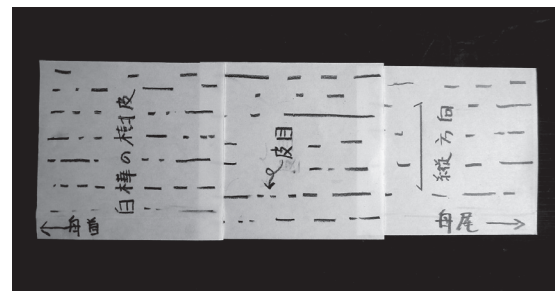


写真 27 各部を松脂の接着剤で接合

## 写真 28

つなぎ合わせた樹皮の上に底板材を並べる。罫線が木目の方向である。



写真 28 底板材を接合した樹皮の上に並べる



写真 29 リブ材をこの木目の向きで並べる

### 写真 29

さらにその上にリブ材を並べる。罫線が木目の方向である。

片側に 2 人、都合 4 人でカヌーの形に曲げる。完成したカヌーが国立民族学博物館収蔵標本番号 H0236600 ナーナイのチョウザメ鼻のカヌーである。同形のカヌーの写真は後項で紹介する。

### (3) 骨組みを造り、それから樹皮で外殻を覆う

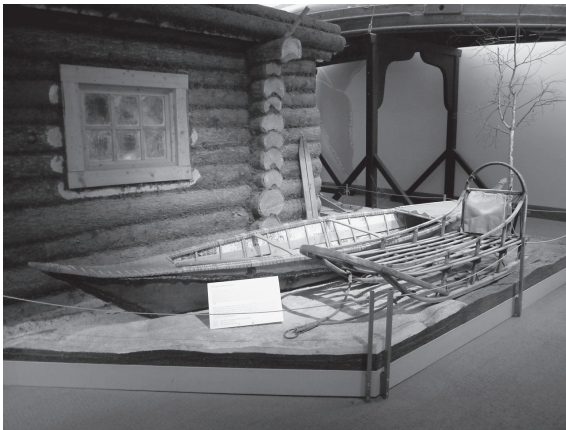


写真 30 カヤック型バーチ・バークカヌー (アサバスカン様式)

### 写真 30

アサバスカン様式のカヤック型バーチ・バークカヌー。イヌイットが造るカヤックと同様、まず骨組みを造り外殻で被う。

似ているのは造り方の手順、構造だけでなく、その形や小さなデッキがあること、またダブルブレードパドルで漕ぐことも共通する。

これまでの研究ではエスキモー＝イヌイットは獣革舟＝カヤックを造り、インディアン＝ネイティブ・アメリカンは樹皮舟＝バークカヌーを造ったとされているが、昨今のクストカメラ

ラやアンカレッジ博物館の研究では、アラスカ・キナイ半島のクック湾側では Dena'ina インディアン (アサバスカン・インディアンの支族) もカヤックを造り、使っていたのではないかと報告されている。

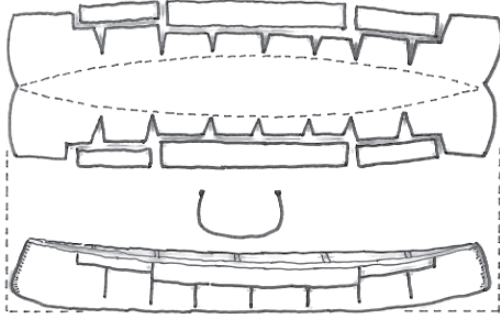
(4) 樹皮で外殻を造り、それから板材の補強材を納める (写真 24、図 3 を参照)。これについてはこの後の 4) (2) の「制作方法・組み立て」の項で説明を加える。

### 3) 樹皮の使い方

樹皮の使い方は 2 種類に大別できる。

(1) 船体の前後方向に樹皮を長く用い、樹皮を船底から舷側に継ぎ足して使う

図 3 樹皮を舷側に継ぎ足す



### 図 3

緻密な構造で、船体強度の強いバークカヌーに見られる樹皮の使い方。

図のような樹皮の使い方をする事により、いっそう滑らかな舟体曲線を造ることができる。特に舟底 (キールライン) の舟首・舟尾方向の反り上がりを微妙に調整できる。

(2) 船体の横方向に樹皮を長く使い、樹皮を船体の前後方向に継ぎ足して使う(写真26~28を参照のこと)。

#### 4) 制作方法

参考事例として筆者が行ったアルゴンキンインディアン様式のバーチ・バークカヌーの工程を簡単に紹介する。

(1) 材料の採取と加工 2. 1) 「素材」を参照のこと。

- ① 樹皮の採取→水付け(乾燥を防ぎ、樹皮を柔らかくする)
- ② 木根紐・唐檜の根の採取→下処理・水付け
- ③ 木材の採取・一抱えほどの材→割出し、裂き出し、成形、水付け、曲げ
- ④ 接着剤・松脂の採取→湯煎して膠などを加える

「木材の成形」先曲がりナイフとその使い方(写真31~33)

材は自分の腿の上に置き、ナイフは手前に引く。刃先が自分の脇腹のところを通るので注意が必要。刃先の曲がり角度は用途に合わせ様々である。

握り柄は親指を内に入れるものと、外に出すものがある。



写真31 腿の上に材を置いて手前にナイフを引く



写真32 親指を中に入れるナイフの握り柄



写真33 親指を外に出すナイフの握り柄

(2) 組み立て

- ① 樹皮を舟型に整える(木根紐で縫い合わせ、松脂で接着する)。
- ② ガンネル、ビーム、バウ、スターンの補強材を付ける(木根紐で結ぶ)。
- ③ 底板とリブ材を船体に入れる(リブ材は熱湯をかけながら曲げる)。
- ④ 樹皮の防水として縫い合わせ部の外側に松脂を塗る。
- ⑤ 船体に文様を施す。

「樹皮の加工」

図3のように下加工した樹皮を、次頁の写真34~35のようにカヌー・プレースに整え、継ぎ足した樹皮を木根紐で縫い合わせる。

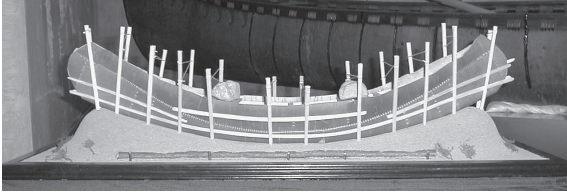


写真 34 横からのカヌー・プレイスの形状

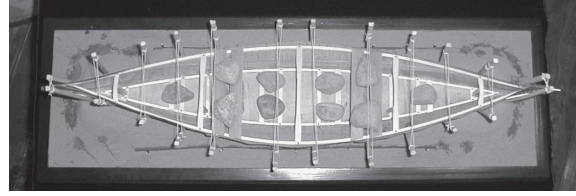


写真 35 上部からのカヌー・プレイスの形状

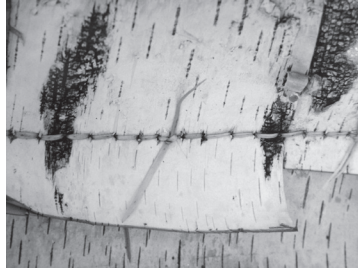
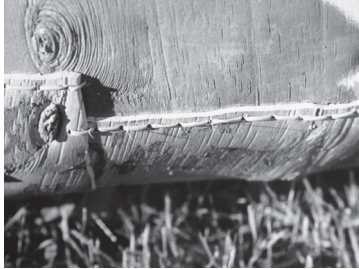


写真 36 木根紐を使用した樹皮の縫合部の表（左／写真 36-1）と裏（右／写真 36-2）

写真 36-1

木根紐による樹皮の縫い合わせ。表から。

写真 36-2

木根紐による樹皮の縫い合わせ。裏から。



写真 37 舟首、舟尾部分の縫合部

写真 37

舟首、舟尾の縫い合わせ。

写真 38、39 はその上部、内部構造だが、この曲線を保持する材が内側には組み込まれている。厚み約 1 cm、幅約 4 cm、長さ約 1 m ほどの唐檜材を、団扇の竹の骨組みのように、材の先端から材中央へ細かく裂く。団扇の骨組みは団扇状に裂いた材を広げるが、この保持材は舟首、舟尾の曲線に合わせて、裂いた部分を曲げて使う。



写真 38 上部から見た舟首、舟尾部分の補強



写真 39 内部から見た舟首、舟尾部分の補強

写真 38

舟首・舟尾の補強。上部からみたところ。

写真 39

舟首・舟尾の補強。内部からみたところ。

## 写真 40

ガンネル、ビームを取り付ける。



写真 40 ガンネルとビームを装備

## 写真 41

ガンネル、樹皮を木根紐で縫い合わせる。まず錐<sup>きり</sup>で縫い穴をあけて、先端を鋭利に落とした木根紐を通す。撚りをかけた糸や真田紐のように伸縮性はないが、平紐なので結束する部材をしっかりと合わせることができる。結束部は乾けば締まり、濡れるとゆるむ。舟体に適度な柔軟性を保てる。



写真 41 木根紐にてガンネルと樹皮を縫合

## 写真 42

床材を敷き入れる。これは少しずつ部材を入れ舟型を整えている。型が決まれば、底全体に床材を敷く。舟形の微妙な形成は樹皮に熱湯をかけながら、床材を敷き、リブ材を入れながら調整する。材は現代工業で生産される均一化されたものではない。一枚一枚性質が異なり、曲がり方も違えばしなり方も違う。

日本の宮大工集団には『木組みは人組み』という教えがあるが、バークカヌー造りの真髄もそこにある。材、一つ一つに均一性を持たせるのではなく、個性が違う材の集団を協調させて一つの舟を機能させる。バークカヌー造りを通じ、調和・和<sup>なご</sup>の調べが大切であることを学べる。



写真 42 舟型を整えながら床材を敷き入れる

## 「完成」

リブ材が納められ、樹皮のつなぎ目を松脂の接着材で張り合わせ、文様が施され完成したバーク・バークカヌー (写真 43)。

冬場に採取された白樺の樹の内側は深い焦げ茶色だ。その焦げ茶色の薄皮を削り落とし文様を描く。

ちなみに家族4人が寝起きできる丸太小屋は男1人が1週間で建てる。

バーク・バークカヌーの制作は熟れた職人1人で2週間かかる。



写真 43 バーク・バークカヌーの完成  
写真提供 / David Gaidmark

#### 4. 北米大陸におけるバークカヌーの分布と用途による形状の違い

##### 1) 用途

河川・湖沼用と沿岸海域用の2種類に大別できる。

(1) 河川湖沼用は、移動・交易。狩猟。真菰収穫

(2) 沿岸海域用は主に漁労に用いる

アラスカ・カナダの自然地理図(図4/map1/参考出典元・ブリタニカ国際大百科事典)と、バーク・カヌー分布図(図5/map2/参考出典元・*The Canoe, Encyclopedia Nipponica*)を合わせてご覧いただきたい。

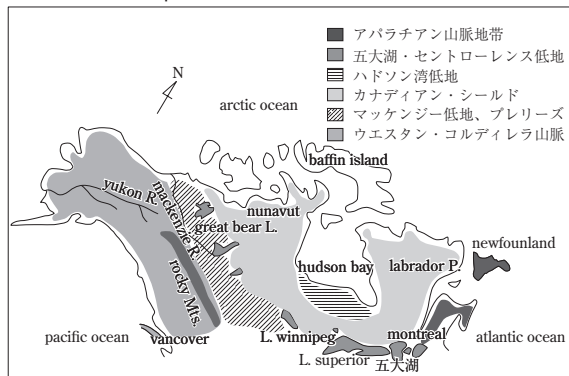
バーク・カヌー分布図にはバーク類(白樺の木など)、バーク・カヌーの素材として使用できる樹皮を持つ、樹木の自生地を記入しているが、ロッキー山脈の高地やマッキンリー山近辺には、樹木は自生していない事をお断りしておく。

さて、分布図にはA.B.Cと示し、バーク・カヌーの分布を3つに大別している。たとえばCは、アラスカまでの範囲を含んでおり、非常に漠然とした区分けであるが、この区分けのなかで用途による形状の違いを比較したい。

また、この分布については、それぞれの地域に複数の部族があり、部族ごとに時代・用途により、デザインがことなるバーク・カヌーが存在した。そのすべてと、構造の違いを詳細に示すには、誌面の都合もあり無理である。

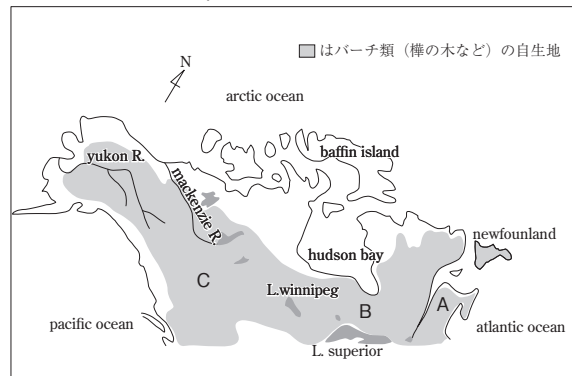
(注釈/大別の方法・解説は*The Bark Canoes and Skin Boats of North America*を参照している。図6~38出典元・*The Bark Canoes and Skin Boats of North America*、*Canoe Construction in a Cree Cultural Tradition*、*Beothuk Bark Canoe: An Analysis and Comparative Study*、*Birchbark Canoes of the Fur Trade*)

図4 map1 カナダ・アラスカの自然地理図



参考出典元/ブリタニカ国際大百科事典

図5 map2 バーク・カヌー分布図



参考出典元/ *The Canoe, Encyclopedia Nipponica*

##### 2) 分布

(1) A 地区 東部沿岸地域

地理的にはニュー・ファウンランド島、プリンスエドワード州、ニュー・ブランズウィック州、ノヴァ・スコシア州、ケベック州のセントローレンス川近辺と、アメリカに入り、メイン州、ニュー・ハンプシャー州を1つとする。

この地域からは Micmac /ミクマック、Malecite /マレシート、St.Francis /セント・フラン

シス (Abnaki / アブナキ)、Beothuk / ベオソックの各ウッドランド・インディアンが作ったバーク・カヌーを紹介する。

東部沿岸地域には、径が太く、厚い樹皮を持つ良質なバークが自生しており、熟練のビルダーも多く存在していた。

#### ①ミクマック (図6 / A-1 ~ 図8 / A-3)

ミクマック・インディアンの人々は狩猟により、暮らしを成り立てていたようだ。彼らの暮らす土地には幾多の湖沼と川・水路があり、入植した白人達は、狩猟・旅・入植戦争に多くのバーク・カヌーを用い、その実用性の高さを知ることとなる。

ミクマックのバーク・カヌーは大別して4つのデザインに分けられる(本章3)の図参照)。

図6 / A-1・全長が2.8~4.6 mのタイプ。小ぶりのタイプは森での狩猟に、大ぶりのタイプは、支流でのナビゲーションや荷物の運搬に使われていた。

図7 / A-2・全長が4.6~6.1 mのタイプは、大きな河川で使用されていた。

図8 / A-3・全長が5.5~7.4 mのタイプは、海での、アザラシ、オットセイやネズミイルカの狩猟に使われていた。その他には、戦いのために作られた物もあるが、全長は5~7 mの範囲で、全幅は狭く作られ、スピードと機敏性を求めたデザインに仕上がっていたようだ。

特色として、他の部族ではみられないバウ、スターンの丸く突き出した形状と、マレシートとも共通するが、イラスト断面図が示すように、ガンネルより外へ出ているボディでのデザインである。このあたりが作り手の腕の見せ所であり、漕いだ時のタッチの軽さにつながるらしい。

#### ②マレシート (図9 / A-4 ~ 図12 / A-7)

マレシート・インディアンもまた、狩猟に依存し、多くの優秀なバーク・カヌーの作り手を育てた。ここでは4つのデザインを紹介しているが、大別すると、ミクマックの分類に近くなる。外観の特徴として、このイラストでは良く判らないのだが、ボトムデザインが海で使われるカヌーは、バウ、スターンに寄るほどVシェイプに、川用はUシェイプになっている。

筆者は、図12 / A-7・Vに近いラウンドボトムのバーク・カヌーを漕いだ事があるが、On side sitting (カヌー縦方向・センターより、利き腕側に座る)で使うと、リーニングが簡単で、小回りの効く機敏なデザインだと思った。

合わせて、紹介していないタイプにムース・ヘラジカの皮を使ったカヌーもあることを、付け加えておく。

#### ③セント・フランシス (図13 / A-8、図14 / A-9)

バーク・カヌーの分布を説明するのは、やっかいな仕事である。ネイティブ・アメリカンは長い時間の中で、移動や統合、分裂、消滅、発生をくり返しており、それぞれが複雑に絡みあいながら、現在に至っているのである。もちろん、それはバーク・カヌーのデザインについてもだ。

セント・フランシス・インディアンは、古くはマレシート・インディアンの一部から構成されていたと言われ、近代においてはアブナキ・インディアンからも構成されていたらしい。18世紀中期には、アブナキ・インディアンはケベック州のセント・フランシス川流域で生活をはじめ、その後セント・フランシス・インディアンと呼ばれるようになったようだ。白人との混血が進んだこの部族は、19世紀中期になるとケベック州において、白人の狩猟や釣り用のカヌーとして、スタン

ダードと言え程にデザインを発達させた。

図 13 / A-8 をご覧頂きたい。全長が 4.5 m と短いにもかかわらず、バウ、スターン先端がかなり絞り込まれている。このデザインによりクイックなターンができるらしい。

#### ④ベオソック (図 15 / A-10~図 18 / A-13)

馴染みのないデザインだが、ニュー・ファウンランド島のベオソック・インディアンのバーチバーク・カヌーだ。深い V シェイプ・ボトムを持ち、空荷で水に浮かべたら、横に転げてしまう。まるで、現在のレーシング・カヌーのフォルムのような。大人 2 人とバラスト 100 kg を乗せて安定するデザインとなっている。彼らは島の内陸部の湖・川はもちろん、島から島への移動にもこのカヌーを使った。図 18 / A-13 をご覧頂きたい。船体中央部が上へ飛び出している。これは積み込んだ荷物が波しぶきで濡れるのを防ぐために、また中央部からバウ、スターンにかけては下へへこんでいるが、海でのアシカやネズミイルカの狩猟をする時に、カヌーの中に獲物を引きずり込みやすくするためだ。

さて、いかがであろうか？ この地域の一つの特色として、カヌーを海での狩猟に使っていたし、海での移動手段にも使っていたということだ。

## (2) B 地区 カナダ中部地域

地理的にはケベック州、オンタリオ州、マニトバ州、サスカチュワン州の東部と、アメリカに入り、ミシガン州、ウィスコンシン州とミネソタ州の各 1 部を含む。

この地域からは Eastern Cree / 東部クーリー、Tetes de Boule / テット・デ・ブール、Algonkin / アルゴンキン、Ojibway / オジブウェー、Western Cree / 西部クーリーと Fur-Trade・交易に使用されたバーク・カヌーを紹介する。この地域も良質なバーチが自生し、多くの有能なビルダーを輩出した。また、ハドソン湾会社・Hudson's Bay Company とのかかわりにより、交易用の大型カヌーも発達した。

#### ①東部クーリー (図 19 / B-1、図 30 / B-12)

図をご覧頂きたい。東部クーリー・インディアンは強いロッカーを持つ、クルッケッド・カヌーと呼ばれるタイプを作っていた。彼らはハドソン湾近辺、ラブラドールの沿岸地域で生活しており、この地域には海を目指し幾多の河川が流れ込んでいる。急流を下るため、ビーチ・サイドでのサーフに対処するために、このようなデザインを考え出したらしいが、強風下では風の影響を受け過ぎて大変だったようだ。

また、ハドソン湾一帯は気象条件が厳しく、バーチは小さい径のものしか育たなかったのも、何枚ものバークをつなぎ合わせ製作したようだ。

#### ②テット・デ・ブール (図 20 / B-2、図 21 / B-3)

彼らは、バーチバーク・カヌーを作るための、良質な材料が豊富にある、ケベック州の南部からセント・モーリス川近辺をテリトリーとしていた。彼らの作るカヌーの構造は、セント・フランシス・インディアンのものと良くにている。全長が 2.4~3.7 m のカヌーは狩猟用に、4.3~4.9 m のカヌーは運搬や移動用に使われていた。また、ハドソン湾会社のために、モンリオールからレイク・スペリオールを交易する、大型のタイプも多く製作していたらしい。



## ③アルゴンキン（図 22 / B-4、図 23 / B-5）

僕の出会ったアルゴンキン・インディアンの人々は、男性も女性も総じて巨漢と呼べる体躯の持ち主が多かった。体が大きく力強いのが、彼らの特質らしい。

彼らもまた、入植者との接触により、深くハドソン湾会社とかかわって行くこととなる。彼らの作るバーチバーク・カヌーについては、次回、詳しくふれるとしよう。

## ④オジブウェー（図 24 / B-6～図 26 / B-8）

オジブウェー・インディアンも立派な体躯を持ち、力強く、優秀な作り手はもちろん、漕ぎ手・カヌーマンを多く輩出したようだ。彼らの活動範囲は広く、レイク・スペリオールから遙か遠く、レイク・ウィニペグまでにもおよんだ。

図 25 / B-7、図 26 / B-8 をご覧頂きたい。このタイプは湖沼で栽培する米（ワイルド・ライス、マゴモ）を収穫するためのカヌーだ。日本の古代米と呼ばれる、赤米、黒米とも違うし、東南アジアの長粒米とも異なる、黒米よりも長い、プチプチとした食感を強くした米だ。彼らは様々な調理法を持っていたようだが、僕はリゾットにするのが好きだ。あえて横道にそれてみたが、想像して欲しい。カヌーを漕ぎ、米を食べるインディアンを！ 僕達に植え付けられた、彼らへのイメージ、カヌーへのイメージが変わるのではないだろうか？

## ⑤西部クーリー（図 27 / B-9）

西部クーリー・インディアンは、オンタリオ州・マニトバ州の北部からレイク・ウィニペグにかけて生活していた。カヌーのデザインについては、東部クーリー・インディアンとの共通性はそれほど見られない。

図のカヌーはバーチが入手できない時、スプルース・エゾマツの樹皮を使い、作られていたらしい。

## ⑥ファートレイド・交易用大型カヌー（図 28 / B-10、図 29 / B-11、図 31 / B-13）

さて、大変である。この項目だけで、分厚い本が数冊かけるほどの記録がある。何かの機会があれば、詳細にお話ししようと思うが、今回はなぞる程度でおさめよう。17世紀に入り、イギリス、フランスは植民地政策を行うなか、ウッドランド・インディアンを巻き込み、その思惑を押し進めた。内陸部への冒険や、領地獲得のための戦争に、多くのバーク・カヌーやカヌーマンが利用された。前述したが、脚色が多いとしても映画『ラスト・オブ・モヒカン』（Michael Mann, 20th Century Fox, 1992）などを見れば、概略は理解できると思う。

イギリス、フランス間の紛争が納まると、ハドソン湾会社の毛皮交易が大々的に行われ、ウッドランド・インディアン諸族は交易用大型カヌーの製作、生活ともに深くかかわるようになる。各インディアンが、その地域に相応しいデザインを作り、製作の方法も交叉するようになった。19世紀後半から20世紀前半にはネイティブ・アメリカンの生活様式は大きくかわる（注釈／『グレイ・アウル 野生を生きた男』などが当時の様子を知るにはいいだろう）。その後、入植者達がウッド・アンド・キャンバス工法やウッド・ストリップ工法などでのカヌー製作をはじめ、やがてバーク・カヌーは忘れ去られる存在となったのだ。

図 28、29、31 をご覧いただきたい。多量の交易品を運ぶために、全長が9m以上もあり、多くの漕ぎ手・カヌーマンを必要とした。

### (3) C 地区 カナダ北西部とアラスカ地域

地理的にはノースウエスト準州、ユーコン準州、ブリティッシュ・コロンビア州の沿岸部とアメリカのアラスカ州、ワシントン州を含む。

この地域にも様々なウッドランド・インディアンが暮らしていた。Athabaskan family / アサバスカン語族、Chipewyan / チペワヤン、Slavey / スレイビー、Beaver / ビーバー、Dogrib / ドッグリブ、Tanana / タナナ、Hare / ヘアーなどの人々。彼らの一部は丸木船も作っていた。さらにアラスカ・エスキモーの人々も含めてご紹介しよう。大別すると、3つに分けられる。

#### ①ナローボトム・カヌー (図 32 / C-1 ~ 図 34 / C-3)

内陸部で暮らす、チペワヤンやスレイビー・インディアンが使っていたタイプだ。

アルゴンキンやクーリー・インディアンの古いタイプのバーク・カヌーにデザインが似ている。

#### ②カヤック・フォーム・カヌー (図 35 / C-4 ~ 図 37 / C-6)

全長が 4 m 台のものは狩猟に使われ、全長が 5 m をこえるものは、運搬移動に使われていたようだ。アラスカ・エスキモーは同じデザインで、川での使用には樹皮を使い、コックピット部を大きくあけ、海での使用にはアザラシの皮を張りスキンカヤックとして使っていた。

ボトム・デザインはフラットのシングル・チェーンだが、同じデザインを持つカヤックを、遠く離れた、ハドソン湾近辺のイヌイットやグリーンランド・エスキモーが使っていたことも覚えておこう。

#### ③ Sturgeon Nose Canoe / スタージオン・ノーズ・カヌー (図 38 / C-7)

直訳するとチョウザメ鼻のカヌーとなる。ブリティッシュ・コロンビア州の一部とワシントン州の限られた地域だけで作られていた。なぜこのようなデザインを作るかは、明確にされていないようだ。

バークカヌーの材料として、良質な白樺の樹皮を得られない地域では、代用となる樹皮、あるいは動物の皮を使い、カヌーを作っていた。また、用途に応じデザインを変え、カヤック文化との交わりもご理解頂けたであろうか。

バークカヌーに関する研究者は少ない。ネイティブ・アメリカンの呼び名・自称他称、区分、地域分けも微妙に異なる。誌面が限られた中での紹介は、一つの参考として捉えて頂きたい。

## 3) イラストによるデザイン・用途の比較 (図5 / Map2 を参照に)

イラスト解説は以下の順 大区分・小区分・部族名・用途・特徴・スペック

## (1) A 地区 東部沿岸地域

図6 A-1 micmac 1 Nova Scotia Micmac  
森での旅、軽い荷物の運搬などに使用されていた。ボトムはフラット。

全長 / 4.6 m 全幅 / 80 cm 全高 / 33 cm

図6 A-1 micmac 1 Nova Scotia Micmac

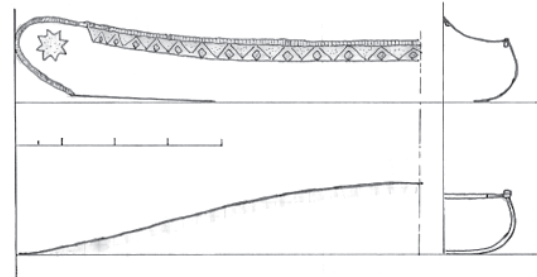


図7 A-2 micmac 2 Micmac 大きな河で使用されたタイプ。ボトムはややラウンドしている。バウには北極星のデザインが施されている。

全長 / 5.3 m 全幅 / 86 cm 全高 / 32 cm

図7 A-2 micmac 2 Micmac

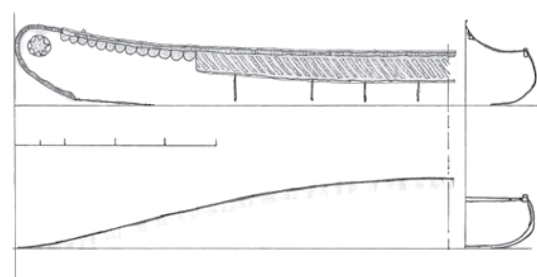


図8 A-3 micmac 3 Micmac ラフ・ウォーター用。特に海で使うためにデザインされている。イラスト中程、ガンネルから上へ突き出した棒は、セールをつけるため。ボトムはラウンド。

全長 / 6.65 m 全幅 / 107 cm 全高 / 51 cm

図8 A-3 micmac 3 Micmac

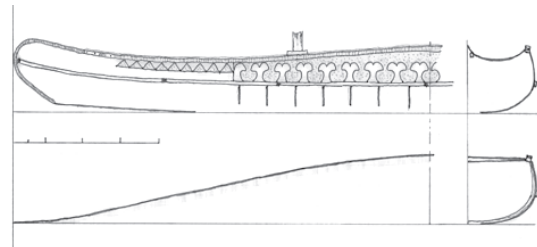


図9 A-4 malecite 1 Malecite 古いタイプの川用。ボトムはフラット。

全長 / 5.7 m 全幅 / 90 cm 全高 / 27 cm

図9 A-4 malecite 1 Malecite

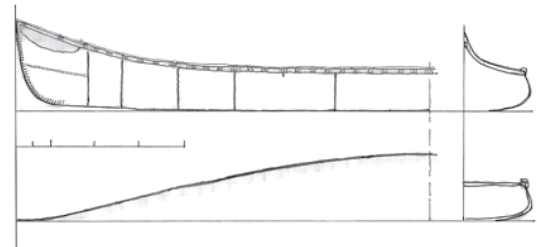


図 10 A-5 malecite 2 Malecite-Abnaki (Penobscot)

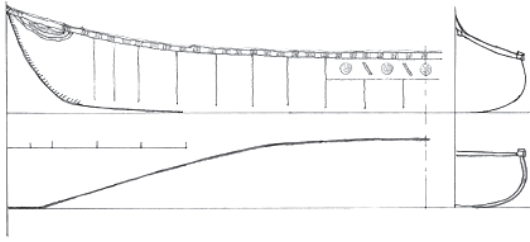


図 10 A-5 malecite 2 Malecite-Abnaki (Penobscot) 古いタイプの海用。ボトムはラウンド。

全長／ 5.7 m 全幅／ 95 cm 全高／ 39 cm

図 11 A-6 malecite 3 Malecite

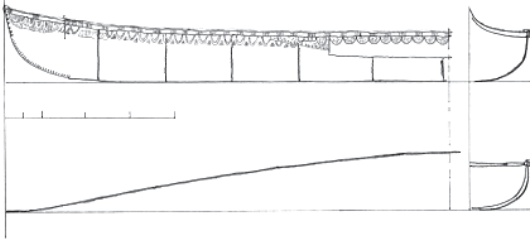


図 11 A-6 malecite 3 Malecite セントジョーンズ川で使用された、レーシング用。ボトムは浅いラウンド。

全長／ 6 m 全幅／ 77 cm 全高／ 32 cm

図 12 A-7 malecite 4 Passamaquoddy

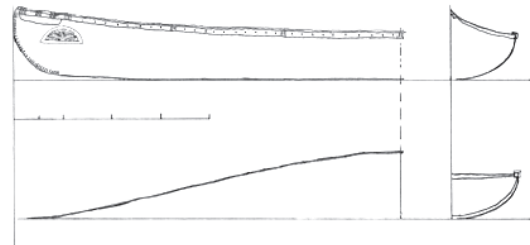


図 12 A-7 malecite 4 Passamaquoddy 狩猟用。特に潮の干満の影響を受ける川で使用されていた。ボトムはラウンド。

全長／ 4.85 m 全幅／ 82 cm 全高／ 28 cm

図 13 A-8 st.francis 1 St.Francis-Abenaki

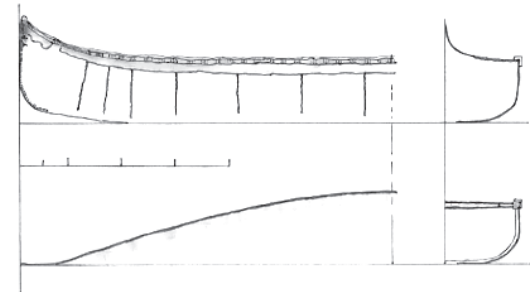


図 13 A-8 st.francis 1 St.Francis-Abenaki 狩猟用、または森での旅に使用された。ボトムはフラット。

全長／ 4.5 m 全幅／ 82 cm 全高／ 34 cm

図 14 A-9 st.francis 2 St.Francis-Abenaki

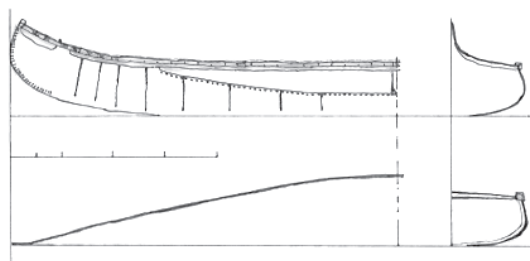


図 14 A-9 st.francis 2 St.Francis-Abenaki 湖で使用されたタイプ。ロッカーを持ち、ボトムは穏やかなラウンド。

全長／ 4.6 m 全幅／ 86 cm 全高／ 31 cm

図15 A-10 beothuk 1 Beothuk ニューファウンランド島で使用されたカヌー。非常に特徴的な形だ。ボトムは深いVシェイプ。全長／4.6 m 全幅／110 cm 全高／64 cm まるでオリンピックの競技種目であるレーシングカヌーのようなボトム形状をしている。

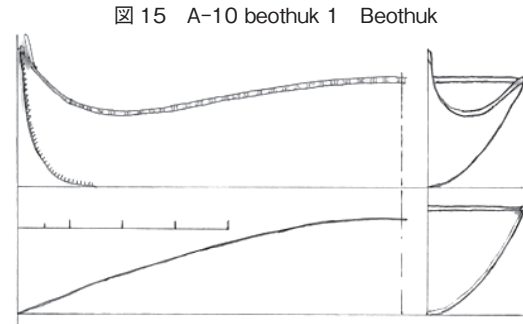


図16 A-11 beothuk 2 キャンプをする時は、このようにカヌーを使った。

beothukに限らず、陸上ではバークカヌーをシェルターとして使う。ウミアックなどの獣革舟もこのように使う。乗り手が担いで陸を移動できる舟の一つの使い方である。

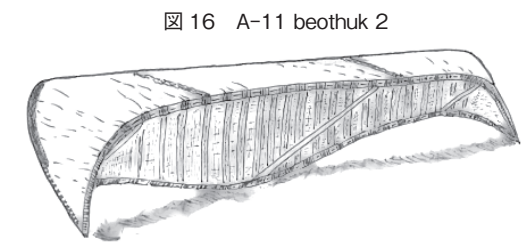


図17 A-12 beothuk 3 正面から。

全長約4.5 m、全幅約1 mのbeothukのバークカヌーは、大人2人と石100 kgを載せて、はじめて水の上で安定する。石を100 kgも載せなくてはならないのは、かなり特殊な舟型だが、奇異なことではない。バークカヌーの大部分は荷物を載せない時にはバラストとして石を積む。そうすることにより、バークカヌーの浮き過ぎ、風流れ、不安定を防ぐ。

つまりバークカヌー、人、パドル、石(荷物)が一組で機能する舟である。

図17 A-12 beothuk 3

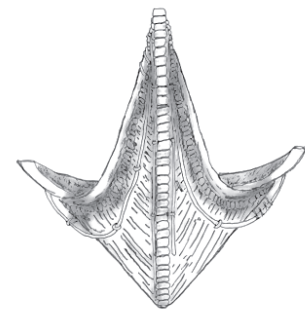
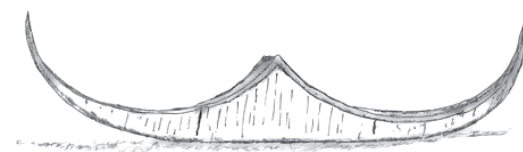


図18 A-13 beothuk 4 1773年にJhon Cartwrightの記録した絵より。

このガンネルの湾曲はイルカなどを捕らえた時に舟の中へ取り入れるためだ。積み込んだ石は獲物と引き換えに海に還す。

図18 A-13 beothuk 4



## (2) B地区 カナダ中部地域

図19 B-1 eastern cree 2 Ungava-Cree (Naskapi) ラブラドル東部で使用された。ロッカーを持ち、ボトムはややラウンドぎみのフラット。

全長／5.5 m 全幅／89 cm 全高／38 cm

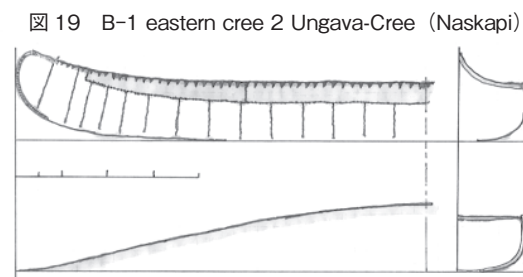


図 20 B-2 tetes de boule 1 Tetes de Boule

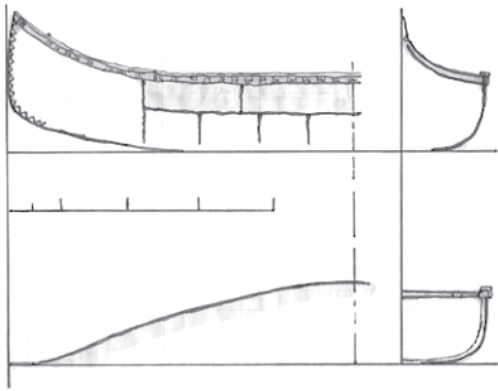


図 20 B-2 tetes de boule 1 Tetes de Boule

小ぶりの狩猟用。ボトムはフラット。

全長／ 3 m 全幅／ 67 cm 全高／ 30 cm

図 21 B-3 tetes de boule 2 Tetes de Boule

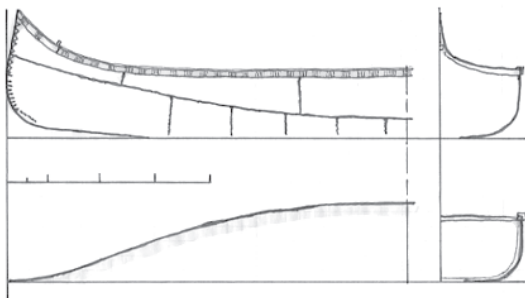


図 21 B-3 tetes de boule 2 Tetes de Boule

移動や運搬に使われたカヌー。ボトムはフラット。

全長／ 4.5 m 全幅／ 85 cm 全高／ 36 cm

図 22 B-4 algonkin 1 Algonkin

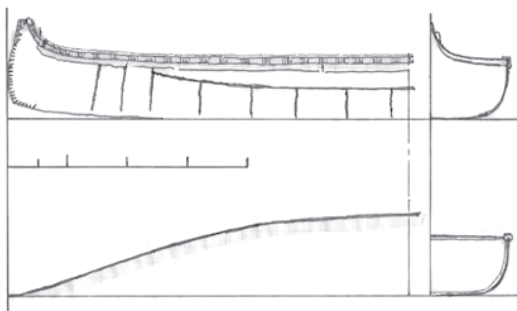


図 22 B-4 algonkin 1 Algonkin 古いタイプの狩猟用。ボトムはフラット。

全長／ 4.1 m 全幅／ 81 cm 全高／ 30 cm

図 23 B-5 algonkin 2 Algonkin (Wabanaki Chiman)

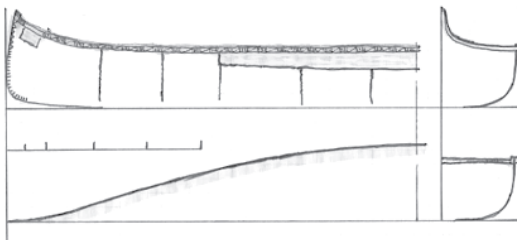


図 23 B-5 algonkin 2 Algonkin (Wabanaki Chiman)

筆者が滞在した地域のカヌー。ボトムはフラット。

全長／ 4.8 m 全幅／ 85 cm 全高／ 34 cm

図24 B-6 ojibway 1 Ojibway 狩猟用。東部のオジブエ族が使っていたもので、古代から伝わるデザインと考えられている。ボトムはややラウンドぎみのフラット。

全長／3.8 m 全幅／80 cm 全高／38 cm

図24 B-6 ojibway 1 Ojibway

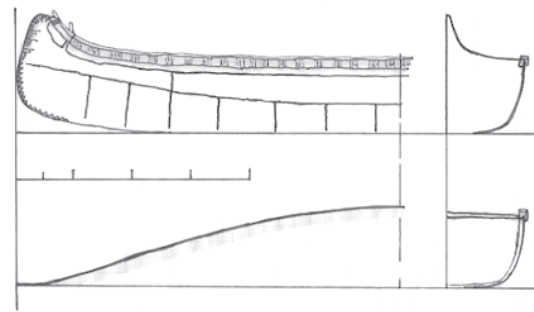


図25 B-7 ojibway 2 Ojibway 湖沼に栽培する米の収穫用。ボトムはややラウンドぎみのフラット。

全長／5.5 m 全幅／100 cm 全高／43 cm

図25 B-7 ojibway 2 Ojibway

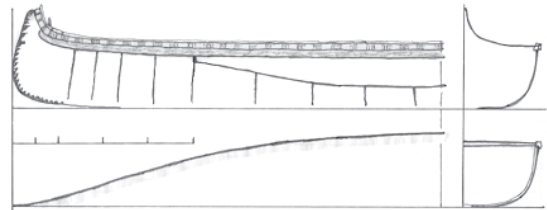


図26 B-8 ojibway 3 Cree-Ojibway 西部のオジブエ族がロングレイクで、米の収穫用に使用したカヌー。ロッカーを持つロングノーズ・タイプ。ボトムはややラウンドぎみのフラット。

全長／4.9 m 全幅／86 cm 全高／40 cm

図26 B-8 ojibway 3 Cree-Ojibway

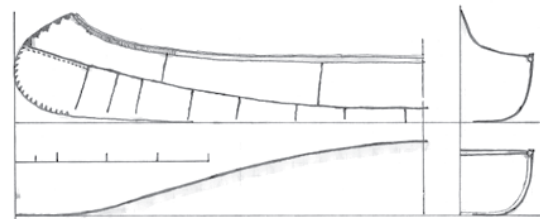


図27 B-9 western cree 1 Western Cree ジェームズ湾・北西部、ウイニスク川で使用されたカヌー。ボトムはややラウンドぎみのフラット。

全長／4.3 m 全幅／86 cm 全高／38 cm

図27 B-9 western cree 1 Western Cree

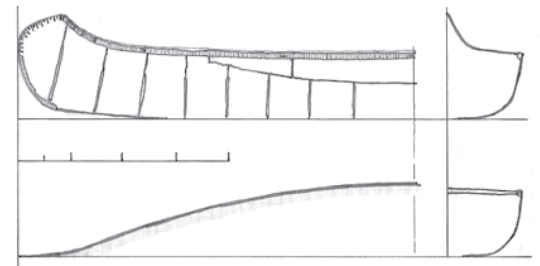


図28 B-10 fur-trade 1 Iroquoi 族や Trois Riviere 族が、ハドソン湾会社の交易用に作った大型カヌー。モントリオールとグレート・レークの間を就航していたタイプ。ボトムはフラット。

全長／11 m 全幅／180 cm 全高／80 cm

図28 B-10 fur-trade 1

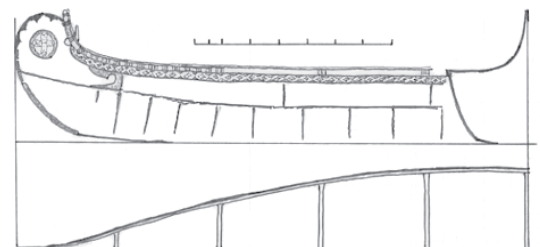


図 29 B-11 fur-trade 2

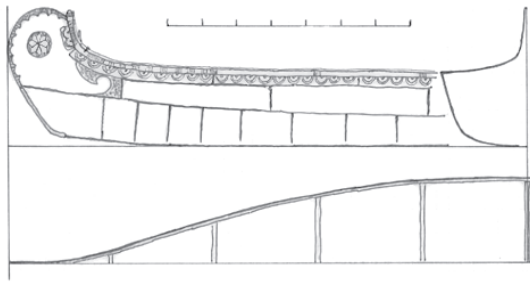


図 29 B-11 fur-trade 2 Cree 族がハドソン湾会社の交易用に作った大型カヌー。ジェームス湾近辺を就航していたタイプ。ボトムはややラウンドぎみのフラット。

全長／ 8.9 m 全幅／ 126 cm 全高／ 66 cm

図 30 B-12 eastern cree 1 Unagava Cree

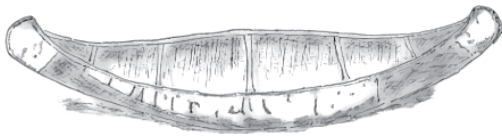


図 30 B-12 eastern cree 1 Unagava Cree

大きく反り上がったロッカーを持つタイプ。

図 31 B-13 fur-trade 3



図 31 B-13 fur-trade 3 ハドソン湾会社の交易用大型カヌー。1892年に北部ケベック州の Lake Chibougamau で撮影された写真をもとに描いたイラスト。ご覧のように大勢の人間を乗せ、交易品の運搬に使用していた。

(3) C 地区 カナダ北西部とアラスカ地域

図 32 C-1 narrow-bottom canoe 1 Chipewyan

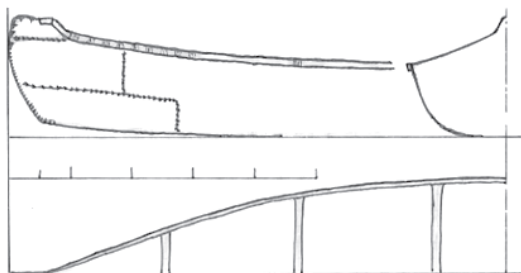


図 32 C-1 narrow-bottom canoe 1 Chipewyan 荷物の運搬や家族での移動に使用された。ボトムは、ややラウンドぎみのフラット。

全長／ 5 m 全幅／ 95 cm 全高／ 36 cm



図 33 C-2 narrow-bottom canoe 2 Athabaskan 荷物の運搬や家族での移動に使用された。ボトムは、ややラウンドぎみフラット。全長／6.1 m 全幅／113 cm 全高／38 cm

図 33 C-2 narrow-bottom canoe 2 Athabaskan

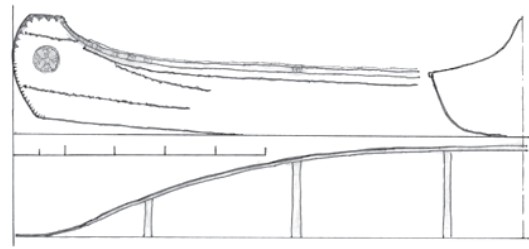


図 34 C-3 narrow-bottom canoe 3 Slavey 主に穏やかな水域で使用された。ボトムは穏やかなラウンド。全長／5.8 m 全幅／112 cm 全高／37 cm

図 34 C-3 narrow-bottom canoe 3 Slavey

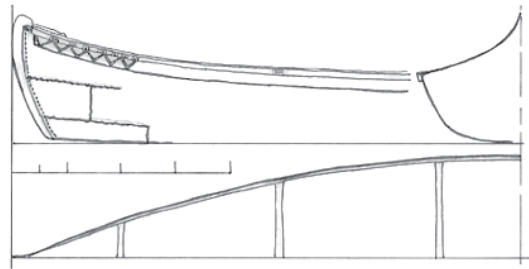


図 35 C-4 kayak-form canoe 1 Alaskan Eskimo カヤックの形状を持つカヌー。ユーコン川下流域で使用されていた。ボトムはハードチェーンのフラット。全長／4.4 m 全幅／66 cm 全高／30 cm

図 35 C-4 kayak-form canoe 1 Alaskan Eskimo

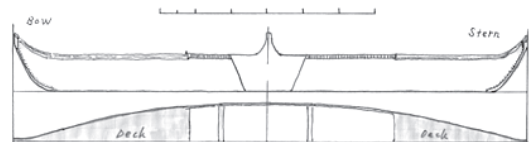


図 36 C-5 kayak-form canoe 2 Canadian Athabaskan カヤックの形状を持つカヌー。ボトムは緩やかなフレアーサイドのフラット。全長／4 m 全幅／67 cm 全高／20 cm

図 36 C-5 kayak-form canoe 2 Canadian Athabaskan

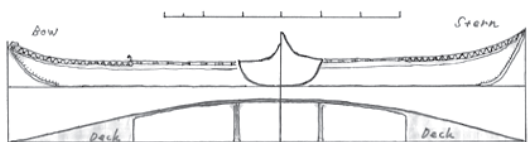


図 37 C-6 kayak-form canoe 3 僕には正確な部族名が判らない。ブリティッシュコロンビア州やユーコン川上流地域で使用されていた。ボトムはハードチェーンのフラット。全長／5.6 m 全幅／63 cm 全高／24 cm

図 37 C-6 kayak-form canoe 3

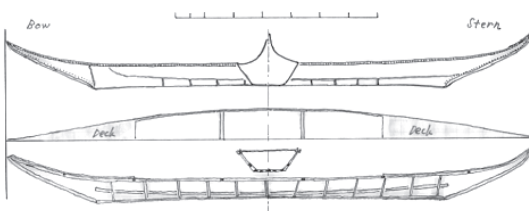


図 38 C-7 sturgeon-nose canoe 1 Kutenai

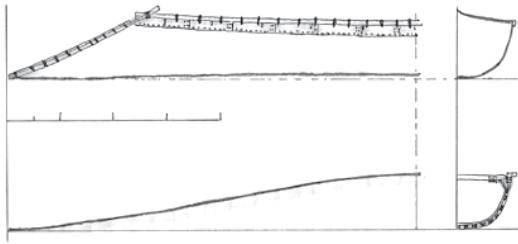


図 38 C-7 sturgeon-nose canoe 1 Kutenai 特徴的なバウ、スターンを持つカヌーである。ボトムは穏やかなラウンド。  
全長 / 4.7 m 全幅 / 65 cm 全高 / 30 cm

\* 図版・地図は出典元より筆者が手描き模写したものをデータ処理した。

## 5. 櫂 = paddle = パドルと身体技法 = 漕ぐ姿勢と漕ぎ方

カヌーを漕いだ経験がない方は腕の力で漕ぐと思いがちだが、そうではない。体幹の大きな筋力（上体をねじる力）、脚力（踏み込む力）を利用し、その力を腕から櫂に伝え推進力とする。

また、帆がなくとも、風や波の力を巧みに使い推進力とする。その場合は保針する舵取りの技術が大切になる。

時として波風に翻弄されカヌーが転げそうになる。傾いたカヌーのバランスを立て直すのも櫂の重要な役目である。

ここでは写真を多用して解説する。論考は前述の、『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』2に掲載した「日本に収集されたカヤックとバークカヌー」をご参照いただきたい。

### 1) 櫂

櫂・パドルは2種類に大別できる。

- (1) 片刃櫂 = シングルブレードパドル。水を掻くブレード = 水刃が片側だけのパドル。
- (2) 双刃櫂 = ダブルブレードパドル。ブレードが両側にあるパドル。



写真 44 双刃櫂は両側にブレードがある（横から / 写真 44-1 : 左、正面から / 写真 44-2 : 右）

## 2) 身体技法=漕ぐ姿勢と漕ぎ方

双刃櫂を使う姿勢（写真 44-1、44-2 参照）は大旨、投げ足である。ここでは片刃櫂で解説する。

## (1) 漕ぐ姿勢

## ① 投げ足で座る。

概ね、舟幅が狭く、全高が低いバークカヌーを漕ぐ時の姿勢。



写真 45 片刃櫂を漕ぐ投げ足の姿勢（横から／写真 45-1：左、正面から／写真 45-2：右）

## ② 正座に近い座り方。

バークカヌーを漕ぐ時の主な姿勢である。親指と膝頭で踏ん張りが利くので力強く漕げ、また重心も低いので繊細な操作もしやすい。



写真 46 立膝の正座に近い姿勢（横から／写真 46-1：左、正面から／46-2：右）

③腰掛ける。

毛皮交易用などの大型のバークカヌーで、多量の荷物を運び、長時間に渡り漕ぐ時に多く見られる姿勢。



写真 47 腰掛けて漕ぐ姿勢 (横から／写真 47-1：左、正面から／ 47-2：右)

(2) 漕ぎ方

①前後横、回転させる (写真 45-1～47-2 参照)。

前進 自分の体より前の水を前から後ろに漕ぐ。

後進 自分の体より後ろの水を後ろから前へ漕ぐ。

②舵をとる (写真 48-1、48-2 参照)。

曲がりたい方の、自分の体の後に水刃を差し込み、水を当て抵抗を作る。



写真 48 曲がる方向の体の後ろに水刃を差す (横から／写真 48-1：左、正面から／ 48-2：右)

## ③ バランスをとる (写真 49-1、49-2 参照)。

カヌーが傾いた方の、自分の体の横に水刃の面を水面に向けて、水面を叩く。



写真 49 水面を水刃で叩いてバランスをとる (横から／写真 49-1：左、正面から／49-2：右)

## (3) 柄の握り方・掲げ手



写真 50 順手は手の甲を上を持つ



写真 51 逆手は親指を上を持つ



写真 52 柄頭にかぶせるように握る

## ① 順手 写真 50

北米大陸ではあまり見かけない掲げ手の握り方である。特に柄頭がこのような棒状の片刃櫂で多く見る。沖縄のサバニを漕ぐ櫂・ウェークなどはこの順手で握る。広く世界に分布する片刃櫂の掲げ手の握り方としては一般的である。

## ② 逆手 写真 51

やはり柄頭が棒状の片刃櫂で見る掲げ手の握り方である。穏やかな水面をゆっくりと漕ぐ時など逆手で握るようだ。また、帆舟の舵取りが強風のなかで舵を取る時はこのように握ることもある。

## ③ 柄頭を握る 写真 52

北米大陸の片刃櫂の掲げ手の握り方としては、圧倒的に多い。理由は柄頭が棒状ではなく T 字状で、この T の頭を手のひらで被うように握るからだ。

## [補説]

筆者は作り手でもあり漕ぎ手でもある。どの握り方が優れているとは言えない。道具の形状とその状況に応じて掲げ手の握り方を選択する技術が肝要である。道具の機能は、使い手の技量により引き出される。

## 6. 終わりに

### 1) チョウザメ鼻のカヌー 太平洋を隔てた共通性

国際常民文化研究機構の業務で、国立民族学博物館に収蔵される、東北アジア・アムール川の民・ナーナイのバーチ・バークカヌーを調査した（標本番号 H0236600）。

特異な舟首と舟尾をした「チョウザメ鼻のバークカヌー = Sturgeon-Nose Bark Canoe」と、呼ばれ分類されている。

これと同形のカヌーが、太平洋を隔てたほぼ同緯度、北米大陸西海岸ブリティッシュコロンビア州のロッキー山脈に暮らす、クートニー / Kootenay とシュスワップ / Shuswap に共通して見られる。

2010年からさまざまな手だてを使い、その関連性を調べようとしているが、如何せん情報が少なく、遅々として進まない。ところが、昨今動画サイトや SNS の普及にともない、稀な情報が入手できるようになった。ブリティッシュコロンビア州のある地域で Sturgeon-Nose Canoe の復元を行い、実漕されているようだ。

いずれその地を訪れ、詳しく調査する予定である。



写真 53 Kootenay のチョウザメ鼻バークカヌー  
写真提供・船木卓也

### 2) もう一つの課題

さて、2011年3月11日以降、日本の様相は大きく変化した。

世界に分布する伝統的な舟造りの技術や漕法、航海術を調査し、それらを如何に社会に還すか筆者個人の課題としている。

本年になり、福島県南相馬市の NPO 法人の依頼で、福島県産木材の有効な利用方法の一つとして、カヤックやカヌー、およびパドルの制作指導に取り組んでいる。

現場に足を運ぶと、そこにある山積した問題はとて根が深く、複雑である。紐解き、解決の糸口を見つけるにはとんでもない根気が必要に思う。どこまで役に立てるか分からないが、今生の務めとして責を果すつもりである。



写真 54 NPO 法人・自然環境応援団代表・上條大輔氏  
枝跡を見て、櫓を作るのに適当な木材を選ぶ



写真 55 材取りをする上條大輔氏

## 参考文献

### 和文

- 『ビギン川のほとりで』 アレクサンドル・カンチュガ 北海道大学図書刊行会 2001年  
『文化の自然誌』 煎本孝 東京大学出版会 1996年  
『カナダインディアンの世界から』 煎本孝 福音館書店 2002年  
『北の民の人類学』 煎本孝 京都大学学術出版会 2007年  
『シーカヤック教書』 内田正洋 海文堂出版 2009年  
『カナダ先住民物語』 エミリー・カー 明石書店 2002年  
『北太平洋の先住民交易と工芸』 大塚和義編 思文閣出版 2003年  
『文化と環境』 岡田宏明 北海道大学図書刊行会 1979年  
『カヌーとビーヴァーの帝国』 木村和男 山川出版社 2002年  
『毛皮交易が創る世界』 木村和男 岩波書店 2004年  
『パークカヌーは生き残った』 ジョン・マクフィー 白水社 1995年  
『北西海岸インディアンの美術と文化』 D. キュー 六興出版 1990年  
『丸木舟』 出口晶子 法政大学出版局 2001年  
『毛皮と人間の歴史』 西村三郎 紀伊國屋書店 2003年  
『極北のインディアン』 原ひろ子 中央公論社 1979年  
『海と川のインディアン』 ヒラリー・スチュアート 雄山閣出版 1987年  
『ラディカル・オーラル・ヒストリー』 保莉実 御茶の水書房 2004年  
『環太平洋の環境と文化』 北海道立北方民族博物館 北海道大学出版会 2006年  
『アメリカインディアンの世界』 マーガレット・フィート 雄山閣出版 2000年  
『太平洋開かれた海の歴史』 増田義郎 集英社 2004年  
『古代日本の航海術』 茂在寅男 小学館 1992年  
『モンゴロイドの地球』 極北の旅人 米倉伸之 東京大学出版会 1995年  
『ブリタニカ国際大百科事典』 TBS ブリタニカ 1972年  
*Encyclopedia Nipponica* 小学館 2001年

### 欧文他

- Builder of birch bark canoe*, William Hafeman, Minnesota Historical Society, 1969  
*Alaska Native arts and crafts*, Alaska Geographic Alaska Northwest Books, 1985  
*Qayaqs and Canoes*, Alaska Native Heritage Center, Alaska Native Heritage Center, 2001  
*IVALU*, Betty Issenman, Musée McCord d'histoire canadienne, 1988  
*The Weymontaching birch bark canoe*, Camil Guu, National Museums of Canada, 1974  
*The Indian crafts of William & Mary Commanda*, David Gidmark, Stackpole Books, 1980  
*The Algonquin birch bark canoe*, David Gidmark, Shire Publications, 1988  
*Birch bark canoe*, David Gidmark, General Store Pub House, 1989

*The bark canoes and skin boats of N.A.*, E.T.Adney, Smithsonian Books, 1983  
*How to build an Indian Canoe*, Georg S. Fichter, David Mckay Company, 1977  
*Cedear*, Hilary Stewart, Univ of Washington Pr, 1984  
*Beothuk bark canoes*, Ingeborg, National Museums of Canada, 1985  
*Canoe construction in a Cree cultural tradition*, J.G.Taylor, National Museums of Canada, 1980  
*Canexus: The Canue in Cnadian Culture*, James Raffan Bert Horwood, 1988  
*Bark Canoes*, John Jennings, Firefly Books Ltd, 2004  
*Sanatujut*, Judy Hall, Canadian Mus of Civilization, 1994  
*Algonquin Ethnobotany*, M.J.Black, National Museums of Canada, 1980  
*Esquimaux,people du Quebec*, musee du quebec, musee du quebec, 1966  
*The Canoe*, Philip Shackleton & Kenneth G.Roberts, Macmillan of Canada, 1983  
*Les Athabascans, ces etrangers du Nord*, Royal Scottish Museum, Royal Scottish Museum, 1974  
*Alaska Native Art*, Susan W.Fair, Univ of Alaska Pr, 2006  
*Birch bark Canoes of the fur trade*, T.J.Kent, Silver Fox Enterprises, 1997  
*Wrapped in the Colours of the Earth*, Taamusi Qumag, Mccord Museum of Canadian Histoty, 1992

参考映像

『ナーナイのバークカヌー制作記録』 国立民族学博物館・佐々木史郎 2005年  
*Qayaqs and Canoes*, Alaska Native Heritage Center, 2001